

宮に起り、處暑甲子を陰遁の中元として、震の三碧星、中宮に起り、霜降甲子を陰遁の下元として、乾の六白星、中宮に起なり、是陰陽二遁の三元、日家九星の起例なり、

〔方鑒秘傳集〕上三元九星之說

通德類情に曰、河洛は天地の秘を洩す、而して義文は畫卦に因るを以てし、禹箕は演濤に因るを以てす、其理至て精しく、其用至て博くして區々たり、撰擇は特に其中の一端耳と、今方鑒家者流の論各異同ありて、或は紫白吉星を採、又天月二德を尊み、乃至陰陽貴人を信ずる、抔皆得たる所の術を以て、互に權を張り我を募りて、撰擇區々なりと雖も、其原を推ときは、すべて河洛より起る者ゆえ、唯大同にして小異ある耳、然を彼家にて褒善するものを、是家にては貶惡するの類ひ屢ありて、俗是が爲に迷惑する者少からず、かく吉凶相反するは、只其神殺の名稱而已に泥み、進退盛衰の理を察めずして、猥に善惡を示すが致す所なり、謂つべし、易は六十四卦にして、兩筮同卦を得ること稀なり、然れども事物一なるときは、判斷符節を合すと、入神の徒の考察此のごとし、故に曰、筮に吉凶なし、事に吉凶ありと、易の繫辭傳に見えたり、今此方鑒の術も又他ならず、其習道を異にする耳、止る所は一定なり、依て玄術を得れば、兩考更に互迭なきこと理の自然なり、學士つとめて怠ることなかれ、抑方鑒の起例を論ずるに、三元家九星を以て原とす、茲に天月德及び陰陽貴人等は、乃九星の生旺に乗じて以て其德益あるの趣、既に五要奇書に述るが如し、又紫白吉星と號るは、遁甲奇門の名稱にして、三元家九星に備はれる吉凶の稱なし、唯其生剋を以て吉凶を辨ず、三台便覽及び三白寶海等に、五性命の人須く白中の剋殺を忌べしといへる、即是なり、蓋すべて吉凶の眞理は、偏に生剋を以て原とす、通德類情に曰、今協紀辨方一書を閱て始めて知る、吉凶神殺は悉く五行の生剋製化を本として、之を爲ことを、而して爰に其本を考ふれば、自から河洛に始まると、所謂河洛は渾然轉運の氣機、即體用の二なり、彼の三元家九星は河洛の星